
暗殺者育成遊戯

健康に生きる尾床

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者育成遊戯

【Nコード】

N7876W

【作者名】

健康に生きる尾床

【あらすじ】

組長の女に手を出し、殺し屋に始末されてしまったヤクザの下っ端構成員の男。次の瞬間に男は赤ん坊になっていた。そこは暗殺者斡旋を生業としている曰く付きの家、奴隸や孤児を拾っては殺し屋に育て上げていく闇の一族の住処。男はそこで第二の人生を歩んでいく。※主人公はゲーム感覚で他人に殺人を強要する外道です。それが不快であるならば「戻る」を押してください。※もう一つ執筆している作品『馬鹿で臆病で最強の生き残り奮闘記』を優先しますので亀更新となります。

第0話：さらば、今の人生（前書き）

気まぐれに更新

第0話：さらば、今の人生

俺は雨の中を死にものぐるいで走っていた。

殺し屋から逃げているんだ。

俺はいわゆるヤクザで下っ端構成員として生計を立てていた。

自分でも言うのも何だが、それなりに女にはもてて粹がっていたのだ。

だが、調子に乗りすぎて組長の女に手を出したのが運の尽き。

組長は激怒して俺にこうやって殺し屋を差し向けている。

全く女に手を出したぐらいで殺し屋差し向けるとは、なんて玉の小さい組長なんだろうか。

だが、そんな玉が小さい組長にやられようとしている俺は梅干し以下の野郎なんだろうな。

右下腿に何かが刺さって躓いてしまう。

水たまりにこけてしまい、自分の右足を確認する。

投げナイフでやられてしまったか…。

拳銃ではなく刃物で殺すあたり、かなりの凄腕の殺し屋なんだろう。

地面に蹲ってくる俺に近づいてくるのは何て事も無いただのサラリーマンのような風貌の野郎だ。

「ははっ…」

こんな何処にでもいるような個性の埋没した野郎なんかにやられてしまうとはな…。

これが俺の結末だというのか…。

どうせならアニメに出てくるような神秘的で綺麗な女暗殺者に殺されたかったぜ…。

まあ、足掻いたって仕方ねえ…。

来世を楽しみにして、今の人生おさらばといこうか…。

殺し屋が俺を無表情で見下ろし、刃を光らせてくる。

今度生まれ変わる時はアニメのような刺激的な世界がいいな…。

目の前が真っ赤に染まり、俺は笑いながら殺されていった…。

……………。

第1話：ガラム（前書き）

文字数少なめで

第1話：ガール

.....。

眩しい。

何処だ、ここは？

「あなた、私の可愛い坊や起きたわよ」

「おお、そうか！」

二人の男女が俺をじろじろと見てきてやがる。

男は黒いスーツに銀髪をオールバックにした紳士風の出で立ち。

整った堀の深い顔立ちの中に暗い感情を潜めている油断ならない野郎だ。

女の方はファンタジーに出てくるような貴婦人のようなドレスを身に纏い、紅い口紅に綺麗な金髪を腰ま伸ばした綺麗な女だった。

男女のペアのことはともかく俺は確か殺し屋に始末されたはず。

それが今、俺は生きている。

それに身体が動けねえ。

ここは何処だ？

「ほほう、活きのいい赤子を産み落としたな。リディアよ」

三十過ぎの油の乗ったダンディなオヤジが生暖かい息を吹きかけて俺の顔を覗き込んでくる。

息が臭い！

俺に近寄るんじゃない、ダンディな糞オヤジが！

「あらあら、泣いてもますわよ。本当に元気な子ね」

もう一人俺の顔を覗き込んでくるのは飲み屋でママやってそうな綺麗な熟女だ。

野郎の臭い息と違って、美女の吐息はどの香水にも勝る匂いだな。

もっと俺の顔を覗き込んで綺麗な顔を見せてくれ。

くそっ、身体さえ動けば速攻でベッドインなんだけどな…。

けど、女の目をよく見てみるとただ者じゃないのが分かるぜ。

一見、男好きするような艶やかで優しそうな笑みを浮かべてはいるが、目がぬいぐるみの目玉のように光が無い。

絶対に殺しをやってる目だな、あれは。

これでも下っ端とは言え、元ヤクザの構成員だったんだ。

目を見れば、どれだけ修羅場を潜ってきているのか分かるっただ。

それよりも現状を把握しなければな…。

「あなた、この子の名前はとうしますの？」

「そうだな。ここは闇の家に相応しい名というわけではないか。この子の名前はガルム。ガルム・サザーランドだ」

おいおい、ガルムって北欧神話に出てくる獵犬の名前じゃねえか！

けど、妙に馴染む名前だな。

元ヤクザの下っ端構成員である俺にある意味相応しい名かもしれないぜ。

息の臭いダンディな糞オヤジの癖になかなかのネーミングセンスだな、褒めてやるよ。

「うふふっ…あなたがつけた名前を気に入ったみたいよ」

熟女は艶やかに光る唇を俺の頬に押しつけてくる。

見れば見るほど良い女だぜ。

こんな糞オヤジにはもったいねえな。

糞オヤジは俺を宝物を扱うように抱き上げてくる。

「ふはははっ！ガルム！お前も大きくなったらリディアのように美しく強い殺し屋を育て上げ、ものにしてみせるのだぞ！」

「あらあら、あなたったら…」

糞オヤジは正常人が聞いたら確実にいっちゃってる人扱いにされるようなことを平気でほざいている。

それを包容力有る笑顔で受け止めているリディアと呼ばれた美熟女。どうやら俺はアニメやラノベで出てくるような転生というやつを体感しているようだな。

こんな逝かれた言葉を恥ずかしげも無く吐けるのはそれが常識になっている世界だからだろう。

俺にとっての非常識が常識となっているようなファンタスティックでグロテスクな世界。

しかも糞オヤジが吐いた逝かれた言葉の内容を吟味して察するに俺の前にいた世界の道德なんざ糞でしかない弱肉強食の世界だと見た。俺はその弱肉強食の世界を生きている野郎共のガキとして生まれ変わったというわけなのか…。

「ガルムが嬉しそうに笑っているわね」

「将来が期待出来るかもしれないな」

上手く立ち回っていけば、裏の世界で生きてきた俺にとってこの上

なく心地良くなるかもしれないな…。

そのためには歩けるようになるまで待たんといけねえ…。

下っ端として地味な仕事をしてきた俺としては待つことは何て事はねえさ。

どのみち今の俺は他人に縋るしか能が無いただのガキだ。

下の世話だって喜んで受け入れてやるよ。

とりあえずはこの美熟女の御奉仕を堪能しながら数年をだらだら過ごすとするか…。

「立派に育つのだぞ！ガルムよ！」

糞オヤジ、てめえはさっさと仕事をして俺の養育費でも稼ぎやがれ
ってんだ！

……………。

第2話：楽しい英才教育

六年の歳月が流れ、俺は言葉を操り、歩くことも可能になっていた。ここまで来るのに長かったぜ。

リディアのおっぱいプレイやお風呂プレイ等とガキならではの楽しみをたっぷり堪能させてもらったが、いずれも受け身でしかなかった。

受け身も悪くは無かったが、いかんせん手足が自由に動けないことで快感よりもストレスが溜まるばかりだったな。

だが、そんな不毛な日々も終わりが来たというもんだ。

これからが俺の本当の第二の人生の始まりだぜ。

このサザーランド家は代々殺し屋を育成することを生業とした闇の家だということは糞オヤジから下の世話を受けていた時に嫌というほど聞いた。

そして、サザーランドに生まれた者として将来、奴隷やら孤児を拾って殺し屋として調教していくことが使命だということも…。

下っ端として地味な仕事をやらかされていた俺としてはこの上無い刺激的な仕事だ。

俺の母であるリディアも元々は奴隷出身で糞オヤジが拾って殺し屋として育てられていたことが成り染めの始まりだったらしい。

何ともラノベの題材になるような出会いだ。

「おおっ！可愛いガラムよ！お前はもう六歳になったのだ。サザーランドに生まれた者として早速、良い場所に連れて行ってあげよう」嬉しそうに俺に抱きついて頬刷りしてくる暑苦しい糞オヤジ。

せつかくリディアの香水で充満していた俺の身体が野郎の体臭に汚されてしまったぜ。

後でリディアに抱きついて殺菌してもらうとして、糞オヤジが言う「良い場所」とは何処なのか聞くことにする。

「父上、良い場所とは一体何処なのですか？」

「よくぞ聞いてくれた！可愛いガラム！それは勿論…」

糞オヤジはアダルトビデオに出てくる鬼畜野郎のような嫌らしい笑みを浮かべ、俺を見つめてくる。

「くっくくく…」

糞オヤジはもったぶるように笑ってやがる。

子供が急かしてくるのを待っているつもりか？

勿体ぶらずにさっさと言えってんだ！

きもいスマイルを見せるんじゃないやねえぞ！

「早く教えてくださいよ、父上…」

仕方ねえな、愛らしい子供らしく可愛く急かしてやるよ。

だから、とつと吐けや、このシヨタコンオヤジが！

「ふふっ…では教えてやろう。奴隷市場さ…」

……。

……。

…。

さすがファンタジーだ。

六歳児の俺を連れて行く「良い場所」が奴隷市場だとはな…。

これも闇の一族ならではの英才教育ってやつなのか。

それにしても何で糞オヤジにエスコートされて奴隷市場を野郎二人でデートなんだよ！

奴隷市場なら元奴隷のリディアの方が詳しいはずだろ！

どうせならリディアにエスコートされたかったぜ。

この糞オヤジはマジでシヨタコンなんなのか？

「これはこれはディーゼル様。いつも最前にくたさる有り難うございます」

ギヤルゲーに出てくる如何にも小悪党臭漂うハゲ丸が俺と糞オヤジを迎えてきた。

このハゲ丸が奴隷商人なんだろうな…。

糞オヤジとハゲ丸が時代劇に出てくる悪代官と越後屋のように見えるぜ。

「相変わらずの汚い面だな、ラット。今日は私の可愛い息子に社会勉強をさせるために来た。暫く回らせてもらおうぞ」

「ははっ！どうぞ心ゆくまでご覧になってくださいませ」

ハゲ丸と話す糞オヤジはいつも俺に見せる親馬鹿を潜め、サザーランド家当主としての顔を垣間見せていた。

やはり腐っても闇の人間というわけか…。

糞オヤジめ、今は従順で可愛い息子でいてやるよ。

だが、いずれ糞オヤジを隠居させ、俺がサザーランドの当主として栄華を極めてやるさ。

その暁にはリディアを寝取らせてもらおうぜ。

それまではせいぜい楽しませてもらうか。

さてと、とりあえずは糞オヤジの英才教育とやらを勤しむとするかねえ。

第二の人生初の楽しい社会見学タイムの始まりだ。

第3話：奴隷共は三角関数

奴隷市場はまるで馬小屋のような汚い場所だった。

あるいは藁とか置かれた鉄格子の中で奴隷共がくつろいでいるアナログな刑務所のような場所とも言うべきかねえ。

それにしても臭いな。

売り物なら手入れして綺麗にしとけてんだ。

さらに言えば掃除してない人間中古品ショップみたいなもんだな。

それとも埃まみれの生きたアンティークショップかねえ。

俺としてはこの世界そのものがアンティークのように思えてくるぜ。

糞オヤジはいちいち俺の仕草や言動に過剰に反応して感動してきてうざいから無理矢理別行動を取らせてもらった。

繋いでいた手を離れた途端に涙目になってやがったが、男の涙なんて下水道の生水にすら劣るもんだ。

奴隷と言え、だいたい女に限る。

野郎な奴隷なんて弾避けや使いつ走り以外に何の需要も無いからな。女であれば性欲の捌け口にも使えるし、側に置いとくだけで目の保養にもなる。

だが、サザーランド家で生まれた者として美女であれ何であれ、殺し屋として育てる義務が俺にはあった。

前世で殺し屋に始末された俺が今度は殺し屋を育てる側に回るなんて運命の女神も粋な計らいをしてくれたもんだぜ。

さてと、生きたフィギアを探すつもりでだらだらと奴隷市場を見回るとするかねえ。

……。

……。

…。

やっぱり奴隷は美女美少女に限るな。

逝かれたようにぶつぶつ言ってる奴や虚ろに空を眺めてる奴。

ギラギラと目を光らせているような奴やこの世の終わりのように絶望に満ちた目をしてる奴などと選り取りみどりだぜ。

とりあえず一通りのタイプを見定めるとするか。

まずはツンデレ系と無口系、それと妹系に姉系かねえ。

未亡人という設定もいいが、いかんせん俺はまだ六歳児だ。

今の俺では敷居が高すぎるかもしれん。

髪型もロングヘアのショートカット、ポニーテールにツインテールと一通りは揃えたいな。

宝塚に出てくるようなゴージャスなドリル頭はさすがに奴隷市場にいないだろうから却下だ。

それに俺はドリルは好みなんかじゃねえ。

まあタイプや見てくれも大切だが、何よりも上手く殺し屋に仕立て上げれるかどうかが問題だ。

具体的にどうやって育てるかは分らんが、精神崩壊がきたような過酷な訓練を強いるんだろう。

壊れないような頑強な精神力も伴ってないと話にならないわけだな。

目星は決まった。

後は忌まわしい限りだが、糞オヤジに可愛らしく懇願してみるとするか…。

よし、糞オヤジの所にダッシュだ！

……。

……。

…。

糞オヤジの姿を見つけることが出来たぜ。

まだハゲ丸と一緒に時代劇の悪党宜しくの陰謀臭を漂わせてやがる。

「父上」

「おおっ！どうしたんだ？愛しいガルムよ！」

糞オヤジは大仰に両腕を広げて俺を迎えてくる。

胸に飛び込めってのか？

くそっ、頼み事をするためだ。

涙を吞んで茨の園に飛び込んでみせるぜ。

俺は糞オヤジの胸の飛び込んで上目遣いしてやる。

「父上、私は3人ほど奴隷が欲しいです」

六歳児の子供が玩具なんかじゃなくて奴隷を強請るなんてこの世界でなければ、普通はありえんのだろうな…。

「おおっ！ガルムよ！お前は何て勉強熱心なんだ！3人なんてけちくさいことを言わず十人だろうと百人だろうと与えてやるぞ！」

糞オヤジが感涙して俺の頬をごりごりと髭面を押しつけてくる。

身の毛がよだってくるが、大人しく我慢するんだ！

下手に拒絶してへそを曲げられてしまっても困るからな…。

それにしても本当に親馬鹿だな、この糞オヤジは…。

俺は目星を付けた奴隷3人娘がいる場所に糞オヤジの手を引っ張って案内していく。

……。

……。

…。

「本当にこの3人でいいんだな、ガルムよ…」

糞オヤジは鷹のように鋭い眼光で俺が選んだ奴隷3人娘を舐め回すように物色してくる。

さすがは殺し屋幹旋を生業とする男の面構えというやつなのか…。

さっきまでの親馬鹿振りが嘘のようだぜ。

「はい、この3人を私は所望します」

「よし、だったら買うとしようか。お前ももう六歳となるんだ。しっかり調教して優秀な暗殺者を育成できるようにするんだぞ」

「はい、父上のような立派な暗殺者育成師になってみせます!」

「そうか、期待してるぞ。可愛いガルムよ…」

糞オヤジは俺の頭を気安く撫でながらハゲ丸に金を握らせていく。

「有り難うございます！ 今後も末永くご贔屓を…」

ハゲ丸はほくほく顔で金を握って下品な笑顔を見せてくる。

俺が買い取った奴隷娘共を見る。

一人目は無口系で青色のショートカットの女だ。

胸は一番でかい。

いずれあの谷間に俺の頭を埋めてやるとするか…。

二人目は赤色のツインテイルで如何にも気が強そうな目つきをした
いわゆるツンデレ系になるそうなタイプの女だ。

俺の喉笛を噛みちぎろうするぐらいに敵意を剥き出しにしてやがる。

こういう反抗的な女が調教しがいがあるんだろうな。

それと胸は…少々残念だが、揉めば大きくなるかもしれん。

三人目は茶髪のロングヘアーで儂げでか弱い感じの姉系の女だ。

胸はまあツインテイルの女に比べれば及第点と上げてでもいいぐらい
か…。

あまり過酷な訓練をしてしまうと壊れてしまいそうなタイプだが、

上手くいけば大化けするかもしれん。

壊さない程度に可愛がってやろうかねえ。

「気に入ったか？ガルムよ」

「ええ、有り難うございます、父上」

「そうかそうか。おい、この奴隷共を馬車につぎ込め！私の可愛い息子が選んだ物だ。大切に扱うのだぞ！」

「ははっ！」

糞オヤジは鉄格子を乗せた馬車に奴隷三人を入れるように従者に言い渡す。

六歳児の子供の俺が最初に親からもらったプレゼントが奴隷三人だとはこの世界は本当に最高だな。

「家に帰るまで奴隷共の名前を考えておくといい」

糞オヤジが俺にアドバイスをしてくる。

三人娘共の名前か…。

丁度三人いることだし、数学の三角関数に因んで名付けてやるとするか…。

無口系はサイン、ツンデレ系はコサイン、姉系はタンジェントだ。

家に帰ったら早速調教開始だぜ！

第4話…ご主人様の第一印象

俺は今、家の自室の椅子で偉そうに足を組んで目の前に立ってる三角関数の娘共を見ていた。

三人の腕と足には枷をつけてもらい、右手には奴隷拘束をするための呪いの魔法ステイグマを刻んでいた。

ステイグマは確か聖痕という意味だったな。

ステイグマは主に逆らったときのためのお仕置き用の呪いの魔法だと糞オヤジは言ってた。

そのステイグマを刻まれた者の主もまた同じように対になるステイグマを身体に刻むことになっている。

ステイグマよりもレッテルの方が響きが良くて相応しい気がするけどな…。

それにしても、さすがは何でもありのファンタジーだな。

こんな下らない魔法を開発した輩に拍手喝采を送ってやりたいぜ。

無口系のサインは相変わらず表情一つ変えず黙って俺の顔をただ見てやがる。

現実逃避して人形ごっこでもしてるのか？

「何よ！さっさと私を抱けばいいでしょ！それがあんたがやりたい

ことなんでしょ!」

ツンデレ系のコサインはあざとい程に典型的なザ・ツンデレだ。

こいつ、キャラ作ってるんじゃないのって感じだな。

「あの、私、どうすればいいのでしょうか?」

姉系のタンジェントはおろおろと今の状況に混乱してるようでありっしやる。

これが世に言う絶滅した天然記念物の大和撫子なのか…。

動物愛護団体に売り飛ばしたら多額の懸賞金が貰えるかもしれねえな。

さてと、まずはステイグマの威力を試させてもらおうじゃねえか。

「黙りやがれアマ」

早速、自分の手にあるステイグマを触って、コサインとタンジェントを罰するように念じてやる。

「あぐあああああっ!」

「きゃああああああっ!」

コサインとタンジェントが本当に苦しみやがったよ。

マジですげえ呪いだなおい…。

二人とも床に倒れて苦しみ悶えてるぜ。

コサインなんか涙と涎がブレンドして見てられねえ面になってやがる。

それにしてもサインは二人が苦しんでるのに何も取り乱さねえな。

ひょっとして俺を舐めてんのか？

別に反抗してねえけど態度が気に入らないということでもポチっとな。

俺はサインにもステイグマを通して苦痛を与えてやることにしてやった。

「ううう…うぐぐう…」

よし、メッキが剥がれたかのように無表情から苦悶に満ちた表情になりましたよ。

普段、人形みてえな面してる奴が堪え忍ぶような顔になるのはなかなかこそあるものがあるぜ。

「ああああう！」

サインも他の二人のように床に転げ回って無様に悶え始めてたな…。

何だか興ざめしたな。

無口系だからどんな拷問にも堪え忍ぶかと思ったけど、そうでもな

かったか…。

所詮は人間ってやつだな…。

ここんところもファンタジーでいて欲しかったぜ…。

さてと、これは飽くまでスティグマの威力の確認と第一印象で舐められないための処置だ。

苦しみから解放してやろうかねえ。

俺は自分のスティグマに解放させるように念じてやった。

呻き声が止まって、全力疾走して息切れしたかのように荒い息づかいに変わってきやがりましたよ。

汗だくになって息を吐く姿もまた乙なものだねえ。

「さてと、挨拶代わりの洗礼は如何だったかな。俺がてめえ等のご主人様になるガラム・サザーランドだ。いいか、信仰してる神よりも第一に俺の名を骨の髄まで刻み込めよ」

「あんた、奴隷市場の時は猫被ってわけね…」

「口の利き方に気を付けろ。ちなみにてめえの名前はコサインな。昔の名は溝にでも捨ててしまえや」

「コサインって、私には…」

「また罰を喰らいたいのか？ ああん？」

俺の恫喝に悔しげに口をつむいでいく。

これは愉快痛快だ。

俺がマジでこいつ等のご主人様であることが実感出来るというもんだぜ。

「胸のでかいてめえはサイン。髪が長い姉ちゃんはタンジエントだ。俺はてめえ等の本名や過去には一切興味ねえ。重要なのはてめえ等が役に立つ駒に仕上がるかどうかだ…」

「私達をいったいどうするのですか？」

「質問することを許した覚えはねえが、まあいいだろう。てめえ等は俺の手によって…」

俺は椅子から立ち上がってタンジエントの顎を掴んで凄んでみせる。

「殺し屋になるのさ…はははははっ！」

「そんな…」

「私達が…」

「暗殺者…」

タンジエントを突き飛ばし、三人を傲然と見下して俺は宣言する。

「てめえ等は俺の手によって血も涙もねえ立派な殺し屋にしてやる

んだよ！それ以外にてめえ等の存在価値は無いと思え！分かったか！分かったのなら、分かりましたご主人様と言いやがれ！」

三人は躊躇しながらも戸惑うように口を揃えて俺に言おうとする。

さあ、宣誓しろ。

ここからがてめえ等の地獄の始まりだからよ…。

「「分かりました、ご主人様…」」

……。

第5話：プロは専門知識が必須（前書き）

文字数少ないです

第5話…プロは専門知識が必須

俺は現在自室に引きこもっていた。

机にむかって殺し屋の訓練メニューについて纏めようとするものの
どうも筆が進まねえ。

これじゃあ女共に地獄を見せれないどころか嫌がらせも出来なくな
ってしまうぜ。

三角関数娘共には舐められないように啖呵は切ったもののどうやっ
て立派な殺し屋として育成していくかが問題だ。

サザーランド家は代々暗殺者斡旋を生業にしている闇の名家。

糞オヤジにやり方を聞いてみても「お前の思う通りにやりなさい」
の一点張りだ。

親馬鹿の癖に仕事に関してはきっちり線付けしてやがる所がまたむ
かつくぜ。

「どうしますか？ガラム様」

背後から感情の無い声を出してくるのは糞オヤジが俺に付けた目付
役のマリアだ。

この女もリディアと同じく一流の女暗殺者だったらしい。

モデルになれるような程の長身で腰まで伸ばした青い髪。

整った顔立ちの中にあるのは感情が見えない硝子細工のような冷たい目。

メイド服なんてコスプレをしてるが、中身はまさに真性の殺し屋って感じのおっかねえ女だ。

マリアには既に俺の本性を見せている。

勿論、糞オヤジに報告は厳禁にさせているが…。

ていうかこの女は外面はプロの営業スマイル宜しくの快活な女のはずだが、何故俺の前だと陰気な感じに背後に佇んでやがるんだ。

やっぱり俺の本性を見せてから自分も隠す必要ねえって思ったんだろうかねえ。

まあ、そんなことは激しくどうでもいいことだ。

「どうしますかこうしますかねえ！何か良いアイディアがねえんかよ！マリア！」

「私は殺しの専門ではありますが、教えることは専門外です。悪しからず」

「ちっ！使えねえ女だな」

「申し訳有りません」

いや、この女は俺がどの程度あの女共を仕込めるかを見定めている

んだ。

目付役というよりは糞オヤジが差し向けた監視役と言ったところか……。

俺は前世では一応殺しの経験はあるが、どいつも衝動的にやったものばかりで参考にはなりやしねえ。

そもそも殺し屋の訓練ってどうやるんだ？

喧嘩慣れさせるように反復練習の如くひたすら殺人をやらせてやるべきか？

だったら死刑確定の犯罪者共を集めて、殺しを強要させてみるのはどうだろうか？

糞オヤジはやり方を教えてくれねえが、準備だったら引き受けてくれる。

けど、犯罪者を殺させまくるやり方は却下だ。

殺し屋一人育てるために沢山人を殺させるなんて割に合わん。

殺し屋は殺しのプロだ。

ただの人殺しとは一線を画するような何かを持たせないといけねえ。

それには専門知識が必須となるだろう。

確かな知識に基づくプロならではの殺しのテクニックを身につけても

らわないと駄目だ。

そのためにまずは座学で基礎知識を叩き込んでいくとするか。

万能の天才と呼ばれたレオナルド・ダ・ヴィンチは人を描くためにわざわざ人体図を造り上げ、人間の身体構造を突き詰めていったと聞いたことがある。

だったら、殺しもまた然りだ。

よし、方針は決まった！

女共には解剖学をガリ勉強させてやる！

俺は椅子から立ち上がって背後に立つマリアを見る。

「どうやら方針は決まったようですね」

「ああ、マリア！急いで机を三つ用意しろ。それと物を書くための板もだ！」

「御意に…」

マリアは忍者のように音を立てることなく消えていった。

さてと、三角関数娘共のために殺人塾でも開くとするか…。

……………。

第6話：人殺しと殺し屋は違う

俺の自室は今、机が四つある。

一つは俺の机、残る三つは女共の机だ。

配置としては小学校の教師と生徒が向かい合うような形にしている。

当然、教師は俺で生徒は女共だ。

マリアに副担任あるいは助手として隣に立ってもらっている。

何故、わざわざこんな形にしてもらったかというところまずは形からいこうというやつだ。

俺は教壇で密かに作って置いたハリセンを叩いてガンとぼしてやる。

「よし、てめえ等にはこれから殺し屋を目指す上で色々勉強してもらおう。まずは基礎編っていうやつだな…」

三人娘、いや、サインを除く二人の小娘共の唾を飲み込む音が聞こえてくる。

サインは相変わらず動揺しねえな。

まあいい、とりあえず講義を進めるとしよう。

「いいか、殺し屋と人殺しは違う。人殺しは結果として出来上がる偶然の産物だ。けど、殺し屋は必然でなければいけない。確かな技

術と緻密な計画に基づいて標的を始末していく。これこそが殺しのプロだ！てめえ等が目指すものはそういう類のもんだ。人殺しのよ
うなガキのお遣いじゃねえことを覚えておけ！」

俺はマリアに用意してもらった黒板代わりの板に人の図を書いてい
く。

さらに身体に心臓や脳といった内臓も描いてみせる。

「おっし、まずはコサイン。何処が人の急所になるか言ってみろ」

俺はハリセンをツインテイルのコサインに向けて名指す。

「心臓と頭でしょ。そんなの子供でも分かることよ」

コサインは相変わらず文句垂れるような口調だな。

俺は無言で近づいてコサインの頭をハリセンでぶっ叩く。

コサインの頭にスパーンと小気味の良い音を響いてきやがった。

このハリセンはおもいつきり叩いても怪我させることもねえし、何
よりもこの小気味の良い音が俺のストレスを発散させてくれるから
便利だぜ。

それにしても何故ハリセンというギャグみたいなお仕置きにしたか
というステイグマは強烈過ぎるお仕置きだからだ。

反抗する度に一々発動させて藻掻き苦しんでもらったら訓練が滞っ
てしまうからな。

ステイグマは飽くまで切り札のお仕置きとして控えることにするつもりだ。

「な、何するのよ!」

「黙らっしやい! てめえが生意気な口を叩いたからだ! それに子供でも分かることだと? 馬鹿野郎! てめえ等が目指す殺し屋は子供でも分かることしか知らねってのか?」

「だったら何だって言うのよ!」

俺はやれやれと肩をすくみながらも黒板に書いている人体図にハリセンを指してやる。

「ここに描いている袋みてえな物がある場所全部がそうだ。確かにコサインの言う通り、頭にある脳と心臓は急所であることに間違いねえ。そして、何故この二つが急所として有名なのかはナイフとかで一突きしてやれば、即死するからだ」

「あの…いいでしょうか?」

タンジェントがおどおどと質問しようと声を出してくる。

臆病な感じだが、好奇心はどうやらあるようだな。

好奇心の有る奴はよく伸びるってもんだ。

「質問を許す。何だ? タンジェント」

「他の場所は即死ではないとすれば、死ぬのに時間がかかるということなのでしょうか？」

「良い質問だ。いいか、ここに書いてある袋はどれもが大量の血が集まっているもんだ。人間は全身に血が流れていることによって身体を維持しているもんだからな。そして、身体にある血の三割ほどが無くなれば死に至ってしまう」

「そこが傷つけば、血が沢山流れてしまうわけなの？」

コサインが割り込むように質問してきやがった。

むかつくが一々お仕置きしていたら講義が進まんからスルーしておいてやるか…。

「その通りだ、コサイン。大量出血すればあっという間に三割の血を失って死に至る。だけど、死ぬには少し時間がかかってしまう。だからこそ手っ取り早くぶっ殺すために心臓と脳を狙うわけだ」

多分、これくらいのこととは何となく分かっているのだろうが、プロは「何となく」では駄目だ。

基盤となる確かな知識を持っていて、それを理解した上で仕事しないとプロとは言えん。

それにいざというときには応用力が発揮できなくなる。

「何となく」で仕事を成り立たせる奴は天才だろう。

だが、俺が育てる殺し屋に天才はいらない。

俺が求めているのは地味で堅実に黙って人を殺せる殺し屋。

ソロだろうが、チームだろうが任務を黙ってきっちりこなす仕事人が俺の理想だ。

俺はハリセンで黒板を叩いて小気味良い音を小娘共に聴かせていく。

「まずは腎臓、小便を作るための内臓だ。そして、これが肝臓、身体の中の毒素を解毒する作用がある内蔵だ。それと二つ同じもんがあるのが肺、呼吸するために必要なもんだな。このいずれもが傷つけば多量出血間違いないの致命傷に陥ってしまうわけだ。それと上手くぶっ刺してやれば脳や心臓のように声を上げることもなく即死させることも可能となる。いいか！今俺が喋ってることをためえ等の机に置いてる紙にちゃんと書き写しておけよ。今度試験をするからな」

「早く言つてよ！それを！」

また、コサインが文句垂れてきやがっているな…。

「あの…後で私が見せてあげるから…」

タンジエントは痼癬を起こすコサインを必死に宥めている。

この三人をチームとするならタンジエントをリーダーにすべきだろうかねえ。

それにしても面白くないのはサインだ。

サインは言わずとも黙々と俺の言ったことをメモしてやる。

ステイグマの件といい、この女はほとんど動揺する面を見せてこねえ。

「マリア」

「はい、ガラム様」

「サインの背景について洗ってこい」

「畏まりました」

サインについてはマリアに調べてもらうとするか…。

「それと肺はぶっ刺すと呼吸困難に陥るから悲鳴を上げさせないためには効果的だな。悲鳴を上げさせずに標的が気づかない内に始末するのが暗殺の匠の技っていうもんだ」

とりあえず、こいつ等には徹底的にガリ勉してもらおうか…。

それでもっていずれは実践編で実技テストもやらせてやるぜ…。

……………。

第7話：ファンタスティックなストーリー（前書き）

文字数少なめで気ままに更新させます

第7話…ファンタスティックなストーリー

俺が住まう国ヴァルハラ帝国では王族の血を連ねる四大貴族がいる。

アルセイド家、リングアイア家、ライプニヒ家、そして俺が住まうサザーランド家だ。

アルセイド家は代々騎士を輩出する名門貴族で將軍や騎士団長は主にこの家から出されている。

王族の血が最も濃く、今の王族の血が途絶えれば即座に王位につくだろうと言われている真正正銘の大貴族らしい。

リングアイア家は政治方面で活躍する高級官僚や宰相等と国の要職についている王族に次ぐ権力を誇る家柄だと呼ばれている。

ちなみにアルセイド家とリングアイア家は政敵同士とも言われる犬猿の仲だというのは周知のことだ。

ライプニヒ家は商いを営む貴族で四大貴族の中で随一に財力を誇る名家だ。

軍事資金や国家予算も管理していることで王族に対する発言権も強いらしい。

政治方面で活躍するリングアイア家と親睦を深めていることから王族からは油断ならない貴族とも言われている。

そして、我等がサザーランド家。

主に王家の暗部を引き受ける闇の一族として名を連ねている闇組織だ。

王家の血塗られた歴史には常にサザーランドが存在し、他国との戦争においても情報戦や暗殺、破壊工作等と汚れ役を一手に引き受けている。

それゆえに王族のイヌとも毒蛇とも他の貴族共からは揶揄され、蛇蝎の如く忌み嫌われているらしい。

けど、その代わりに王族からは最も信頼されているとのことだ。

まあ、要するにサザーランドは王家の懐刀ともいうべきポジションだな。

そんなポジションだからこそ、四大貴族の中で国内外含めて最も多く敵を作ってるわけだ。

「サインは王族の血を引いた大貴族、さらには將軍という要職に就いていた元軍人です」

マリアは優秀な秘書というべき働きを見せ、見事にサインの過去を洗い出してくれた。

こいつはマジでとんでもねえメイドだぜ。

いや、寧ろ冥土じゃね？

オヤジギャグを頭ん中で炸裂させながら俺はマリアに渡された書類

を見通す。

「ただ者じゃねえと思ってたけど、まさかここまでのタマだとはな。しかも糞オヤジが始末した敵対国の要人の身内じゃねえかよ…」

ここで一旦話が飛ぶが、ヴァルハラ帝国の王族は聞いた話によると他国に何らかのいちゃもんを付けては戦争を仕掛ける世界規模の傍迷惑なバトルマニアらしい。

その傍迷惑なバトルマニアの犠牲になった国の一つに神聖グラディウス皇国という如何にも清廉潔白を掲げる正義面をした国があった。神聖グラディウス皇国は平和を旨とした宗教国家であり、当時のバトルマニアなヴァルハラを非難するまさに目障り極まりない国。

そこでヴァルハラ王族はグラディウスを邪教徒が蔓延る国だと世界中に宣伝して聖戦発動とか言って戦争仕掛けたわけだ。

もちろん宣伝したのはサザーランドの力によるもの。

けど、いざ戦争に突入するとグラディウスは強い何の、ヴァルハラは忽ちの内に劣勢に立たされ、ピンチになっちまったわけだな、これが…。

そのヴァルハラを手こずらせていたのが、当時のグラディウスで軍神と讃えられていたガレサ・ルシフェルト将軍。

軍神様の神懸かりな指揮でヴァルハラに侵攻されていた国々が解放され、ヴァルハラ包囲網が完成されてしまって、まさに絶体絶命の大ピンチ！

そこで白羽の矢が立ったのは我等が王家の懐刀サザーランド！

サザーランドは即座に王家の要望に応えて刺客を送り、ガレサ將軍を暗殺まさに必殺仕事人！

それからというもののヴァルハラは飛ぶ鳥を落とす勢いで瞬く間に奪われた領土を奪い返していつてグラディウスに猛反撃を開始！

まさにやられたらやり返すバトルマニアに相応しい某SF映画の帝国の逆襲とも言わんばかりにグラディウスを追い詰めていく！

そして、ついにグラディウスは滅亡し、聖戦はヴァルハラの大勝利でもって幕を閉じて感動感涙のファンファーレ！

ヴァルハラは大陸の覇者として世界征服を実現させましたとき…。

めでたし、めでたし…。

とまあ脳内でつい熱く語ってしまったが、そのサインというのはグラディウスの軍神ガレサの妹だったということが判明したわけだ。

サインはまさにサザーランドの血塗られた歴史が生み出した亡霊とも言える存在だったわけだな…。

まさか胸が大きいだけで面白みがねえと思っていた女に大河ドラマの主人公にでもなれそうな素晴らしい背景があったとは良い意味で裏切られてしまったぜ…。

「ガラム様が彼女を引き取ったのは偶然か必然なのかは分かりませ

んが、サザーランドにとって危険な存在だということは確かです。殺りますか？」

「まあ、待て。祖国を滅ぼした元凶である我が家に拾われ、暗殺者として育てられる英雄の妹。最高にファンタスティックなストーリーじゃねえかよ！オペラの題材にでもすれば大盛況間違いなしってもんだぜ！はははははっ！」

「ガラム様？」

無表情な冥土が僅かに戸惑う顔に萌えながら俺は某少年漫画の新世界の神になった気分です足を組んで馬鹿笑いをしてやる。

これは偶然なんかじゃなくて必然、定められた運命ってもんだ。

運命の女神が俺と彼女を引き合わせてくれたに違いねえ。

暫く笑ってから頬杖を立てて、優秀な殺人メイドに気怠げに見据えていく。

「何もすることはねえ。泳がせておけ……」

「ですが……」

「別に糞オヤジに伝えても構わねえぞ。自分を殺すかも知れない女を最高の暗殺者に仕立て上げる。まさに最高の酔狂だぜ！そうだ！俺はこんな刺激的なライフを求めていたんだ！はははははははっ！」

ひたすら馬鹿笑いする俺に飽きたのか、マリアはため息をついてきた。

「私は旦那様から貴方に従うように言い付かっております。ですから、貴方がそう望むのであれば、私はただ従うのみです」

マリアは再び元のむっつりになって慇懃無礼にお辞儀を見せてくる。

これは意外だぜ。

糞オヤジの回し者として、てっきり諫言やらをほざいて俺を戒めるかと思ったんだがな…。

「てめえも体外酔狂な女だな」

「ガラム様ほどではありません」

「くっくくく…違いねえな…」

さてと、俺の人生をチップにした魅惑的なゲームの始まりだ。

ゲームのタイトルは如何にもR指定ですよって感じで…。

「暗殺者育成遊戯」

とでも言うっておこうか…。

……………。

第8話：ゲームは達成率百パーセントを目指す

俺は今日も自室でハリセンを片手に奴隷共に教鞭を振るっている。

全く俺は教育実習生なんかじゃねえのによ…。

マリアに任せようとしても「ご自分で出来ることはやってください」とにべもねえ。

「いいか！急所を一突きするには瞬間的に体重を乗せてやるのが重要だ。深く突き刺せば、それだけ相手を即死に追い遣る事が出来る。心臓や脳なんてガキでも知ってるような急所じゃなくて済むんだ。それでもって急所を一突き出来たことを確認できたら速攻で獲物を抜いて返り血を避けるんだ。そこんとこ分かってるのか？なあ、赤点まっしぐらのコサインさんよ！」

「そんなの軍人じゃないただの村娘の私に分かるはず無いわよ！」

「くっくっ…軍人じゃないねえ…」

俺はサインに視線を向けてみる。

サインは相変わらず置物の人形を装ってやがるな。

だが、その澄ました面も何処まで持つやらかねえ。

「返り血が残れば、証拠が残りやすい。それに血の匂いがついて感づかれることがあるということでしょうか？」

「その通りだ！さすがは試験で最高得点を取ったタンジエントだぜ。おい、コサイン。少しはタンジエントを見習いやがれ！」

「うっさいわね！私には無理に決まってるわよ！」

全く人が優しくしてりゃあつけ上がりやがって…。

これはそろそろ現実とやらを見せつける必要があるな…。

「マリア、手配はもう済ませているか？」

「はい、何時でも…」

「じゃあ、これから小娘共には体験学習をさせてやる。準備しておけ」

「畏まりました…」

俺の隣に立っていたマリアは音も無く消えていった。

「凄いです…」

「何者なの、あのメイドは…」

コサインとタンジエントは夢でも見たかのように消えていったマリアについて語っていた。

全く、この程度で驚いてもらっては先が思いやられるぜ。

「さてと、ずっと座学をやっていてマンネリ気味だっただろ。ここ

で気持ちを入れ替えるためにも“ 良い場所 ”に連れて行ってやるよ」

「良い場所…」

今までほとんど口を開かなかったサインが初めてか細い声を出してくる。

なかなかの美声じゃねえかよ。

メガネ系がメガネを外して美人に見えるように無口系はやっぱり声優のようなコケテッシュな声でないといけねえってもんだ。

「そうだ、サイン。“ 良い場所 ”にだ…」

……。

……。

…。

俺と奴隷娘共はマリアに先導されてサザーランド屋敷の地下へと降りていく。

「まさかこの家の下にこんな場所があるなんて…」

気が強いコサインも僅かだが、声を震わせている。

タンジェントに至っては顔を俯かせてコサインの裾を摘んで付いてきやがってる。

それに比べてサインは悠然に表情一つ変えずに歩いているな…。

けど、それももう終わりだ。

サイン、てめえの人形面を引っぺがしてやるぜ…。

……。

……。

…。

地下の最下層まで辿り着いた先には沢山の鉄格子が付いた部屋が立ち並んでいた。

「何なのここは？」

コサインとタンジェントは互いに抱き合っている。

「見て分かんねえのか？ 犯罪者を閉じこめる収容所に決まってるじゃないえかよ」

「収容所…ですか…」

タンジェントは虐めてやりてえほどに怯えながら聞いてくる。

「そうだ。サザーランドが何故忌み嫌われていて、その代わりに王家には絶大な信頼を寄せられているか教えてやろうか？」

「サザーランドはヴァルハラが溜め込んでいる汚物全てを受け持つ

ているから…」

コケテツシュな声が響き、俺はサインを見て笑う。

「ははははっ…その通りだぜ、サイン。今日はよくしゃべるじゃねえかよ…」

俺の言葉にサインは再びだんまりをしてしまう。

だが、俺には分かるぜ。

てめえが今滅茶苦茶焦燥感に駆られていることをな…。

「マリア、奴等は何処に囚われているんだ？」

「この先で御座います」

さてと、本格的に俺の自作になるリアルギャルゲー「暗殺者育成遊戯」を攻略しようかねえ…。

……。

……。

…。

「ここで御座います」

俺達はこのどの部屋よりも堅固な作りになっている牢屋に辿り付く。

「さてと、ここに収容されてるのは窃盗やら万引きやらのケチな犯罪者じゃねえ奴等が飼われている所だ。マリア」

「では、開けます」

マリアは扉の施錠を外して重々しく開いていく。

そもでもって中身の連中を見たときに一番反応したのが、サインだ。

「ああ…」

俺はこれが見たかったんだ！

無口系が感情豊かになる歴史的瞬間をな！

まずはサインの怯えた顔を脳内のCG観賞に早速収納だぜ！

「どうした、汗が出てるぜ。熱くなったのかよ、サイン…」

「くっ！」

サインは殺気に満ちた目で俺を睨んでくる。

これでサインの憎しみに満ちた顔のCGをさらにゲット！

サイン編CG観賞の達成率はまだ一割にも満たねえが、これからじつくりと百パーセントを目指してやるさ。

牢屋の中には裸にひんむかれて血塗れになっている野郎とアマ共が臭い息を上げて俺を見上げている。

「こいつ等は俺達ヴァルハラ帝国に刃向かった邪教国家グラディウス
の敗残兵共だ」

サインの苦しげな顔が見えてくるぜ。

案外すぐにサイン編CG観賞を百パーセント達成出来るかもしれん
な…。

「マリア」

「はい、これを…」

マリアが俺に手渡したのは果物ナイフ。

「さてと、教科は解剖学実習、そんでもって抜き打ちの実技テスト
だ」

俺は手渡されたナイフを小娘共に突き付けて笑みを浮かべる。

「こいつ等を殺せ…」

……………。

第9話：代名詞や普通名詞よりも固有名詞がインパクトに残る

息を呑んで顔を強ばらせる三人娘を楽しむようにして眺めながら俺は果物ナイフを弄んでみせる。

「…とまあ、てめえ等にはこれからこの御献体共に実践してもらうわけだが、まずはお手本を見せねえとな。マリア」

「はい、ガラム様」

俺の隣に付き添っていたマリアが一步前に出てくる。

「これからこの殺しの匠であるマリア大先生がただで殺しの手本を見せてくれる。夢に出てくるほどに目をかっぽじって見ろよ、てめえ等！」

マリアの背後から黒子擬きの連中が手早く両脇から献体を起こし上げていく。

「ああ、そうそう一応てめえ等のために御献体になってくれる野郎共の自己紹介をしてやらねえとな。こいつの名はライナス・ガールンド。あの魔女ガレサの麾下にいた邪教の先兵ともいうべき野郎だ。俺達のために戦ってきたヴァルハラ兵を殺した大罪人だ」

俺はサインの何かを堪え忍ぶ素顔を観賞しながら丁寧に御献体を紹介してやる。

別にサインに対する嫌がらせだけじゃねえ。

代名詞の「彼」や普通名詞の「男」よりは固有名詞の「ライナス・ガーランド」という御献体をぶっ殺すということを認識してもらった方がより強いインパクトを残せると考えたからだ。

俺は殺人に関しては標的をその他大勢と認識させて教え込むつもりはねえ。

標的がどんな奴かを認識してもらった上でぶっ殺せるような真に鉄の意志をもった殺し屋に仕立てるつもりだ。

標的のことを一々考えるなんてほざく奴が多いが、そんな奴に限って標的に感情移入してしまいやがって失敗する奴が多い。

なぜなら標的をカモやネギだと思いこもうとする奴は心の何処かで感情移入しちまったらどうしょっかと潜在的に恐れてるからだ。

それに殺す標的のことを知ろうとせずに殺ろうとすれば逆に標的に足を掬われるてしまう可能性がある。

標的の全てを洗いざらい受け止めて尚自制出来る奴こそがプロの殺し屋ってものだ。

「では、僭越ながら不肖この私 MARIA が実演させて頂きます」

MARIA は両手でスカートを持ってお辞儀した後、黒子擬き共がライナスを解放していく。

「この忌まわしき魔女め！貴様さ…え…」

ライナスが罵倒を上げてる途中にいつの間にか MARIA が懷に入っ

心臓に果物ナイフを差し込んでいた。

「お疲れ様です」

マリアは胸からナイフをひき抜き、社交ダンスでもするかのようにライナスの背後に回って返り血をさけていく。

「なっ！」

「えっ…」

「っ…」

コサインもタンジェントもあのサインすらも目を見開いてマリアの鮮やかな殺人テクを魅入ってやがった。

ライナスは盛大に鮮血を撒き散らせて壊れた人形のように身体をかくくさせてぶっ倒れていく。

「おえええええっ！」

牢屋に血の匂いが充満し、タンジェントはその場に崩れてゲロをぶちまける。

おいおいまるでサスペンス劇場で仏さんを初めて見てゲロする新米女刑事みてえだな。

俺はゲロするタンジェントを余所に見事な殺人テクニクを披露してくれたマリアに拍手喝采してやる。

「素晴らしい！さすがは殺しの匠だぜ！マリア！」

「恐れ入ります」

そんな俺とマリアのやり取りをコサインは気持ち悪い目でガンつけてくる。

「どうしてそんなに簡単に人を簡単に殺したりするのよ！あんた達最悪よ！」

「何ほざいてやがるんだ？てめえもこれから最悪になっていくんだぜ……」

俺はコサインの頬をハリセンでぺしぺしと叩きながら言ってる。

「てめえもヴァルハラで生きる民草だろうが。この御献体はてめえと同じ民草をぶっ殺して生きてきたんだ。むしろ褒めてもらいたいぐらいだぜ……」

「殺しなんか褒められるもんなんかじゃないわ……」

「あっそ、てめえは国のために血と汗と涙を流してる兵隊さん達を褒められないって言い張るのだな……」

「それは……」

口をつむぐコサインに俺は果物ナイフを突き付ける。

「まあ、下らねえ討論なんかはこれ以上するつもりはねえよ。ほれ、手本は見せてやったんだし、今度はてめえが殺してみやがれよ。お

い、マリア」

「はい」

マリアの促しで黒子擬きはコサインに殺させる御献体を引っ立てていく。

「こいつの名はさっきマリアが見事な手際でぶっ殺したライナスの弟ロベルトだ。こいつもヴァルハラ为民草を虐殺したふてえ野郎だ。だから遠慮無く殺っちまいな」

「よくも兄上を…この悪魔共め！」

ロベルトは怨嗟を言葉を俺やコサインに向けてきてやがる。

「そんな…私が…やったわけじゃあ…」

「くつくつ…あちら側から見るとめえも同類だとよ…ははははっ！」

コサインは見事に恨み辛みの言葉に腰が退けているな。

だが、それでいい…。

そうやってたっぷりと恨みを買っていき…。

恨みを買って慣れてそれがどうしたとスルーして刃を突き立てる度胸を身につけていくんだ。

「貴様等絶対に許さな…ぐはっ！」

「ごちゃごちゃうつせんだよ！この邪教徒風情が！」

俺は喚いているロベルトを蹴飛ばして、恐慌状態に陥ってるコサインにナイフを握らせてやる。

「ほら、耳障りなんだからさっさとぶっ殺せよ」

「いや…そんなの…出来ない…出来ないわ…」

気がつええコサインが涙目で俺に懇願してやがる。

ようやく自分の置かれた現実が見えて来たようだな…。

「てめえの手でこいつを兄貴の下に逝かせてやれよ。それがせめてもの情けってもんだぜ。なあ、コサイン…そうだろう？」

「出来ない…出来ないよおおおっ！」

「やれってんだよ！恨みも憎しみも哀しみも死ねば綺麗さっぱり消してやれる！こいつを殺せば、もうてめえは罪悪感に駆られることはねえんだよ！なぜなら死人に口無しなんだからよ！」

全くみつともなく泣き喚いちゃってよ。

やれやれ、ここは少し優しくしてやるかねえ。

調教の基本は絶望と希望の適度な配分だ。

絶望と希望は使いようってもんだ。

俺は喚くコサインを首根っこを掴んで耳元で囁いてやる。

「冷静に考えてみるよ、コサイン。てめえはこいつを殺さない限り一生恨まれて生きていくんだぜ。友達と遊んでいる時も歌を歌っている時もガキに乳を飲ませる時も愛する男と一緒に寝ている時もずっと恨まれていくんだ。そして、てめえは耐えきれずに気が狂って見たくもねえ悪夢に震えて一生引きこもって過ごしていく。そんな人生にてめえは耐えられるのか？」

「いや…そんなのいや…」

「だったら、やるんだ。安心しな、てめえは良いことをやるんだ。こいつに殺されていった家族の恨みを晴らすんだからよ。むしろてめえは英雄なるんだぜ。少なくとも俺はてめえを英雄と褒め称えてやる。他の誰もが否定しようとも俺だけはてめえを認めてやる」

俺は糞オヤジに強請る時に使う天使の微笑みってやつをコサインにも使っていく。

「本当…に…？」

コサインは希望を見出したかのように俺に縋る目を見せてくる。

これはひょっとして堕ちたかねえ…。

「くっくくく…ああ、俺は嘘つかねえぜ…」

存外呆気ないもんだったな…。

さてと、コサインの処女喪失の瞬間を見さしてもらって感動させてもらうか…。

コサインは幽霊に取り憑かれたかのようにナイフを握って蹲ってるロベルトの方へと向かっていく。

さあ、殺せ…。

殺せ…。

殺せ！

……………。

第10話：初心者には手取り足取り丁寧にお教えします

「私は…良いことをする…英雄に…なる」

「そうだ、コサイン。てめえは生まれ変わるんだ。それで誰もが傳いて止まない最高の女なるんだ…」

コサインは虚ろな面でナイフをロベルトの胸に向けて歩いていく。

ほら、ぶすつと逝って殺れ！

もう少しで処女喪失だ！

鮮血を浴びて虚ろに笑う壊れた姿を俺に見せるんだ、コサイン！

「私は…」

おっと、コサインがナイフを引いてロベルトをぶつ刺すように構えましたよ！

新郎新婦がウェディングケーキをカットする瞬間のような感動的名シーンだ！

このファンタジーの世界にビデオカメラがねえことをこれほど悔やんだことがねえぜ！

コサインはついにナイフを突き刺そうとしてくる！

「私は！」

よっしゃ、コサインのクラスチェンジの瞬間だぜ！

「そんなことをしても貴方は英雄にはなれない…」

「えっ…」

なんだって？

「恨みを断ち切ることは出来ない…」

感動的名シーンとなる瞬間にコケテツシュなノイズが入ってきてN
Gシーンになっちまったなあ…。

「くっくくくっ…」

俺はサインにガン飛ばす。

サインは俺の睨みに何も言うことなくだんまりで返してきやがる。

「サイン…てめえ…」

てめえは無口系なんだろう？

何ここで五文字以上の台詞を吐いてるんだよ、コラ…。

俺は立ち止まってるコサインの頭をハリセンでぶっ叩く。

「何やってんだ？早く殺れよ」

「けど…私は英雄には…」

さらにハリセンでコサインの横っ面を引っぱたいてやる。

「サインの言うことは戯れ言だ。俺の言葉に従え」

「けど…けど！」

虚ろだったコサインの目に光が戻ってきたじゃねえか…。

このやろう…。

だったら、もういいぜ…。

「わりいわりい、てめえは確か赤点まっしぐらの困ったちゃんだったな。そんなてめえにいきなり本番は酷だったぜ」

俺は笑顔でコサインの頭をぺしぺしと叩いてみせる。

「えっと…だったら…」

コサインは隠しきれない歓喜の笑みを見せて期待してやがる。

困ったちゃんだから勘弁して貰えるのかと思ってるんかねえ、この女は…。

さっきまでは絶望から希望を与えてやったが、次は逆だ。

「けどな、俺も一応教師だ。相手が例えどうしようもねえ程の糞つたれな困ったちゃんでも教え導くのが教師の使命ってもんだ。だか

らよ…」

俺は視線をマリアに向ける。

マリアは俺の視線に意味に気づいて頷く。

これぞアイコンタクトってやつかねえ。

「困ったちゃんでも分かるように手取り足取り丁寧に教えてやるよ。
マリア…」

「畏まりました」

マリアは流れような動作でコサインの背後に立って羽交い締めにしてくる。

「えっ？何？」

マリアに拘束されて戸惑うコサインを余所に黒子擬きがロベルトに猿ぐつわを噛ませて、動けないように両脇を固めていく。

さあ、準備は整った。

「何をさせるつもり？」

今度はサインが俺にガン飛ばしてくる。

「ああん？てめえは床にキスでもしてろってんだよ！」

「あぐううああああっ！」

久しぶりにスティグマを発動させちゃいました。

「ぐっ…うあああああああっ！」

反抗するむつつり娘が床で身もだえる姿は萌えるねえ。

「もう止めてください！苦しんでいます！」

苦しむサインが見てられないとばかりにさっさまでゲロっていたタ
ンジェントちゃんがここでようやく見せ場を作ってきましたよ。

「てめえもサインとお揃いになりてえってのか？んん？」

「ああ…あの…その…」

勇ましく言ってみたものの瞬殺かよ…。

これじゃあ単なるギャグにしかないぜ、ミス・ヘタレ。

俺はミス・ヘタレからコサインに目を向ける。

さてと、特別補習だ。

「マリア、きっちりとかきでも分かりやすく教えてやれよ」

「はい、ガラム様。では、コサイン。貴方は力を抜いてくださ
い。私が貴方の身体を使って実演してみせますから…」

「えっ…ちょっと止めて…いや！離してええええっ！」

マリアはコサインを羽交い締めにながらもナイフを握ってる手を掴んで強引にロベルトの方へと刃先を向けさせているな。

俺はマリアの腕の中で無駄な抵抗をしているコサインに笑みを見せていく。

コサイン、てめえが悪いんだぜ。

俺の言葉よりもサインの戯れ言に耳を貸したんだからよ。

「それではコサイン。この肋骨に丁度覆われていない場所が心臓の位置です。早速実演してみましよう」

「いやあああっ！止めて！止めてええええええっ！」

「暴れないでください。手元が狂ってしまいますよ」

激しく抵抗するコサインを余所にマリアの手で容赦なくコサインのナイフがロベルトの心臓の位置まで動かされてるぜ。

さあ、人の身体を貫く感触を味わいな。

「むごおおおっ！」

あらあら、ロベルトの奴は刃が心臓の位置に迫ってくると首をぶんと振り回してきやがったよ。

やっぱり死ぬのは怖いものなのかねえ。

「それでは心臓に向かってゆっくりと刺していきましょう」

「いやあああああっ！」

おおっ、ロベルトの胸にコサインのナイフがゆっくりとめり込んできている！

「もごおおおおっ！」

ロベルトが猿ぐつわの中で絶叫が上げてるのを全身で表現してるぜ！

「これが人を刺す感触ですね。もう少し深く刺せば、心臓を完全に貫けますよ」

「止めてええええええっ！」

それにしても時間かけて胸にナイフをめり込ませるシーンもまた貴重だな。

俺も初めて見るしよ。

おお、コサインのナイフが柄のどこまでめり込んでいったな。

これで死んだか？

「これは私としたことが失礼しました。コサインが余りにも暴れるので手元が狂ってしまいました。心臓の位置はもう少し左よりですね」

「ああう…」

絶対ワザと外したな…。

コサイン如き小娘が幾ら暴れようともマリアほどの殺しの匠が手元を狂わせるなんて天地が裂けてもありえねえはずだ。

こいつはとんでもねえドSメイドだな。

ロベルトなんかはもう白目むいてやがるし、コサインなんかはもう失禁もしてやがるぜ。

とりあえず訓練が終わったらマリアには後で新しいメイド服を俺が手取り足取りで着替えさせてやるとするかねえ。

「それでは仕切治しと行きましょうか。今度こそ一緒に心臓を綺麗に貫くようにしましょう」

「ああ…もういや…ううっ」

マリアがコサインの手を引かせた瞬間にロベルトの胸から血が飛び散ってコサインの顔にひっかかっていった。

「これが返り血です、コサイン」

「いやああああああっ！」

いやあ、容赦無いね、マリア大先生はよ。

せいぜい頑張ってくれよ、困ったちゃん…。

.....
○

第10話：初心者には手取り足取り丁寧にお教えします（後書き）

外道っぽいでしょうか。

御感想待っています。

第11話：御献体には感謝しなければならない（前書き）

思いついたら投稿です。

第11話：御献体には感謝しなければならない

さてと、これでコサインの処女膜が破られるわけだが、俺が初めてタマ殺ったのは何時だったか…。

「今度こそ手元が狂わないように心臓まで誘導させてあげます」

「いああああああっ！」

そう、あれは俺がランドセルを背負うガキだった頃だったかねえ…。

「これで心臓を完全に貫きました。ついからですから他の急所についても手取り足取りお教えしましょう」

「もう止めてえええええっ！」

ヒステリックになったお袋があんまりにも五月蠅かったから、黙らせるために金属バットで撫でつけただけだったのによ…。

「この位置が肝臓です。ここは沈黙の臓器と言われる場所ですから完全に貫く必要があります。今度は思い切り刺すようにしてみましよう」

「もう死んでる！もうやりたくないようおおおおっ！」

電池切れしたロボットみてえにだんまりしやがったから、腹が立って何度も何度も叩いてやったもんだったなあ…。

そしたらいつの間にかサツがきやがって俺を羽交い締めにしたとき

に「何故、殺したか」と聞かれたんだよ。

「次は喉を切ってみましょう。これは悲鳴を上げさせずに殺せることで大変有効です。ただし、血が噴水のように吹きだしてくるので返り血を浴びないように気を付けてください」

「あああああああっ！」

そのサツの言葉で俺は人殺しをしたんだと初めて気づかされたわけだ。

「もし、どうしても返り血を浴びるようなことがあれば、裸になって殺すことを推奨します。血に塗れた服は証拠品となってしまうので」

「血が…血が熱いよおおおっ！」

だから、俺は…。

「もう嫌だあああああっ！」

「だあああああっ！うるせええぞ！マリア、コサインに猿ぐつわを嚙ませて黙らせろ！」

「申し訳有りません、ガラム様。コサイン、貴方はしばらくこれでも嚙んでいてください」

「いや…むぐぐっ！」

たくっ、人がせっかくクールに回想に浸ってるところを台無しにしや

がって…。

それにしても、やっと処女膜を姦通しやがったか。

存外感動もしねえもんなんだなあ。

それともサインの邪魔があつたことで冷めちまったからかもしれな
いか…。

こういう苛々したときにはタバコを吸いてえんだが、まだ俺は六歳
児だから糞オヤジが許してくれないだろうな…。

俺は指二本を口元に当ててため息を付く。

「それは一体何の仕草でしょうか？」

コサインへの故人レッスンが終わったのか、いつの間にか俺の隣に
マリアが佇んでやがった。

「エアタバコだ。気にするな…」

「そうですか」

マリアは細かくつつこまねえから気楽に付き合えるぜ。

さてと、コサインは情けなく泡吹いて倒れてやがるな。

まあ、こいつの補習はここまでにしておくか。

余りやりすぎると壊れるかもしれねえからな。

「マリア、寝ぼけてる困ったちゃんに水でも吞ませてやりな」

「畏まりました」

けど、見学実習ぐれえはやってもらうぜ。

黒子擬きが気絶してるコサインを引っ立たせて水の入った桶に顔を突っ込ませてやる。

「オラ、困ったちゃん、ねんねするにはまだはええぞ。さっさと起きねえと地獄でねんねする羽目になるぜ」

「がぶっ…分かりました！分かりましたからもう止めてえ！」

「よし、てめえは後は見学実習でもしてろ。他の奴の出来具合をきっちり目に焼き付けておけよ…」

「はい…ガラム…様…」

俺は従順になりつつあるコサインの顔にハリセンでぴしぴしと軽く叩いてやる。

さとして…。

「えう…」

俺の視線に気づき、肩をびくつと振るわせるミス・ヘタレことタンジェントちゃん。

「次はてめえに殺ってもらうぜ。試験で最高得点を取った優等生君…」

「私は別にガラム様に言われた通りの解答を…」

「だったら次も俺の言われた通りに殺るんだな。それともコサインのように手取り足取り教えてもらいてえのか？ ああん？」

俺は視線を隣に立っているマリアに向ける。

「タンジェントも私が教えて差し上げましょうか？」

「い、いえ、殺ります！ 殺りますから…」

「だったらちゃんと殺ってくれよ。困ったちゃんのコサインに手本を見せるつもりでな…」

黒子擬きが新たな御献体を用意してくる。

ほほう、サンドバッグにでもしてやりてえようなガタイの良いハゲマッチョが出てきたぜ。

既に猿ぐつわをして四肢には足枷も嵌めている。

万一暴れたら厄介そうだが、俺には…。

「何でしょうか？」

「いや、何でもねえよ」

マリアを見て、鼻で笑う。

俺には最高の殺しの匠がついてるから心配はいらねえわな。

「こいつはアンドレ・ガリアント。ヴァルハラ兵を百人以上血祭りに上げたとんでもねえ野郎だ。けど、今回はてめえのために御献体になってくれるという奉仕精神溢れた坊主に生まれ変わってる。だから、感謝を込めてぶっ殺してやれよ。飯喰う前に食材になった畜生共に感謝のお祈りをするようにな…」

「むごおおっ！ ぐもおおおっ！」

アンドレは茹で蛸のように赤くなって藻掻いてやがった。

まるで照れ隠ししてるみてえだな。

「さあ、殺れ…」

「は…はい…」

タンジェントはナイフを構えたまま動こうとしない。

このミス・ヘタレが…。

俺は手持ちのナイフをタンジェントの頬すれすれに投げてやる。

「ひっ…」

タンジェントの頬に血が流れていく。

それでも俺は投げナイフは結構得意だったんだぜ。

「次、声かけて殺らなかつたらマリアの補習を受けてもらう。いいな？」

「は、はい！」

全くてめえは徳川家康に脅されて裏切る小早川秀明かよ。

せめて明智光秀ぐらいになれってんだ。

同じ裏切り者でも明智光秀の方がまだヘタレじゃねえだが。

さて、次こそは見事にぶっ殺してミス・ヘタレの汚名を返上してみせろよ、優等生君のタンジエントちゃん。

「殺れ」

「うあああああっ！」

タンジエントは破れかぶれの体当たりをするようにして坊主の胸にナイフを突き立てていった。

「むごおおあっ！」

痛みでぶっ倒れたハゲマツチョが激しく身もだえしてる。

下手物のSMプレイを見ている感じだな、おい…。

夢に出てきそうな程にきもいぜ…。

俺はまたエアタバコを吸ってため息をつく。

タンジェントは呆けたようにその場に座り込んでる。

まあ、恐怖を必死に我慢して突っ込んだ気概は認めてやろうかとはちったあ思おうとした。

けど、やっぱり我慢できん。

俺はナイフを突き立てままぜいぜい息を吐くタンジェントにハリセンをフルスイングして横っ面を引っぱたく。

「あう！」

「馬鹿野郎！どこの世界に雄叫び上げてぶっ殺す暗殺者がいる！敵に感づかれるだろうが！それとも何だ？てめえは熱血青春漫画の主人公か？殺しはスポーツなんかじゃあねえんだぞ！しかも急所を外してるしよ…」

俺はきもい動きで苦しがつてるハゲマツチョをハリセンでびしっと指す。

「見ろ！てめえが失敗したから御献体様が苦しがつてるだろ！こいつはてめえのために出家してここにぶちこまれてるんだ！それをてめえは…ほら、謝れ！」

「あうっ！痛い！やめて…むごっ！」

俺はタンジェントの髪を引っ掴んで血塗れになってるハゲマツチョ

の胸にキスさせるようにぐりぐり押しつけやる。

「御献体様に謝りやがれ！一撃で殺せなくてご免なさい、失敗して苦しませてすいません、次は楽に殺しますから許してくださいってな！」

「むぐっ…もげん…なさい…ご免なさい…ころ…しま…から」

「ああん？聞こえねえな！もうちつとはっきり言いやがれや！」

「一撃で殺せなくてご免なさい！失敗して苦しませてすいません！次は楽に殺しますから許してください！」

俺はタンジェントをハゲマッチョから引き離してやる。

「はぁ…はぁ…」

「ようし、よく言ったな。てめえの謝罪はちゃんと御献体様に届いた。次にきちんと殺ったら許せてやるって言ってたぜ…」

「むぐぐっ…」

俺は弱ったゴキブリのように身もだえしているハゲマッチョを見て笑う。

「ほら、てめえの一撃の慈悲を御献体様が待ってるんだ。次こそはきちんと殺れよ…」

「は…はい…次こそは…殺します…」

「良い子だ…」

タンジェントは立ち上がり、獲物を狙う鷹のように心臓の位置に視線を向けてナイフを構えていく。

黒子擬きは虫の息になっているハゲマツチヨを引っ立たせ、的になるように固定させる。

「さあ、御献体様を楽にしてやりな、タンジェント…」

「はい…ガラム様…」

タンジェントは俺の声に従ってハゲマツチヨに向かって無言で突っ込んでいく。

今度は迷いがねえ足取りだ。

ナイフの切っ先がハゲマツチヨの心臓に真っ直ぐ向かっているぜ。

「ふははははっ…」

今度という今度こそはミス・ヘタレからアサシンにクラスチェンジしてくれよ、タンジェントちゃん…。

……………。

第12話：愛を謳う女の話よりも憎しみを謳う女の話の方が盛り上がる（前書き）

久しぶりだから、さらにぐだぐだかも…。

第12話：愛を謳う女の話よりも憎しみを謳う女の話の方が盛り上がる

よしっ、これでタンジエントは目出度くミス・ヘタレからアサシンへとジョブチェンジするかもしれないと思うが…。

「うあああああっ！」

一度あることは二度ある。

念のため、サインにステイグマの戒めを発動させちゃいました。

コサインの時のように水を指されなく無いからねえ。

俺はサインの悲鳴を鼻歌交じりで聞き流しながら、タンジエントの晴れ姿を見る。

タンジエントは無言でハゲマツチョの心臓の位置に見事クリーンヒットさせていった。

顔を真っ赤に塗れたタンジエントは俺の方に向いてくる。

「これで…いいのでしょうか…ガラム様…」

「ははははっ！ブラボー！」

呆気ないように見えるが、俺にとってはこの上無い処女姦通の瞬間だ！

俺は拍手喝采でミス・ヘタレ、いや、タンジエント様を迎えてやる。

「よくやった！タンジェント！てめえは偉大なる一步を踏み出したんだ…」

「あの…私は…ガルム様の期待に応えられたのですか？」

「ああ…てめえは最高だぜ。思わず惚れてしまいそうだ…」

俺はタンジェントの頭を掴んで抱き寄せていく。

「てめえはこれから立派な殺し屋になって世界を見返してやるんだ。俺の手足となってな。光栄に思えよ…」

「はい…ガルム様…」

俺はタンジェントの胸や尻をたっぷりと撫で回してから解放し、黒子擬きに押しつける。

「タンジェント、てめえはもう休め。コサインもだ。この調子で毎日囚人共を捌いていくからな。分かったか？」

「はい…」

「は…い…」

ちっ、もうちっと盛り上がるような返事しろってんだ！

「声がちいせえぞ！分かったか！」

「「はい！」」

「よし、じっくり休めや…」

タンジェントとコサインは黒子擬きに誘導されるように牢獄から出ていく。

さて、不要な役者共には退散を願ってもらったことだし…。

「おい、さっさと起きろや」

俺は床にだんまりと寝そべっているサインを足蹴にしてやる。

サインは感情の読めない目で俺をガンつけてきた。

「どうしますか、ガラム様」

影のように付き従うマリアが伺いを立ててくる。

俺は二本指を口に押し立ててため息をつく。

正直な話、無口系をどう扱うべきか悩み所だぜ。

これが変態オヤジの慰みものとして売り飛ばすんなら薬漬けにして淫乱女に仕立て上げるのもアリなんだがねえ…。

生憎、俺が今やってるゲームは殺し屋育成ゲーであって陵辱レイプ上等の抜きゲーなんかじゃねえんだな、これが…。

しかもこのサインは元軍人で殺し屋とはベクトルが違えど殺しのプロだったということも扱いづれえ要因だ。

つまりこいつは育てがいがねえ単なる乳でか女だという結論に達してしまおうわけだな。

でか乳以外で目に見張るとこと言えば、英雄の妹であるということだが…。

ん？

「くっくっくっ…」

「ガラム様？」

そうだ、こいつは英雄の妹ということでルートに入れば、一番盛り上がることも間違い無しの美味しいキャラじゃねえかよ！

ちまちました陰謀劇なんじゃなく、とびっきりの大河ドラマ的ファンタジーを造り上げる最高の素材だ！

「ひやはははははっ！」

「ガラム様、如何されたのですか？」

「わりいわりい。さてとマリアよ。早速だけこの女にてめえの匠の技を叩き込んでやれ」

マリアは俺の提案に僅かながらも顔をしかめてくる。

俺の唐突な命令でちったあ戸惑いがあるみてえだな…。

「理由を聞いても宜しいでしょうか？」

「理由？くっくくくっ…マリア大先生には特別に教えてやるよ」

俺は無表情のマリアにこの上なく露悪的な笑みを見せつけて答えてやる。

「世界を面白くするためさ…」

「世界を面白くするため…それが貴方の望みなのですか？」

「そうだぜ、マリア大先生よ」

勘が良いマリアなら俺の言葉の意味を理解しただろうな。

さてと、どうでる？

「それが貴方の望むであるならば、私はただ従うのみです。後、一つお願いしても宜しいでしょうか？」

ほう、協力してくれるのはありがてえが、まさかマリアから「お願い」とレアなイベントが降り掛かるとはなあ。

だったら、糞な無理難題でも無い限り聞き届けてやろうじゃねえか…。

「大先生と呼ぶのは止めてください」

「ちっ！それがお願いの内容かよ！詰まらねえ女だな…」

「申し訳有りません」

もう少し可愛いお強請りをしてくれると淡い期待をしたが、マリアのキャラからすれば高望みというやつだったか…。

まあいいさ…。

俺はもう一度サインの身体を足蹴にする。

「ほら、起きやがれ！マリアがてめえに有り難い教えを身体に刻み込んでやると言ってるんだ。泣いて感謝しろ！」

俺の足蹴に対しても微動だすることも無く、背景でも見るかのような目つきで俺を見据えてきやがってくる。

このアマ、六歳児の俺の足蹴なんか屁もでねえってか。

だったら俺にも考えがあるぜ、サインちゃんよ…。

「マリア」

「はい」

マリアが顎で黒子擬きを促し、猿ぐつわを嚙まされた元女騎士の囚人共を引き出してくる。

「…っ！」

「くっくっくっ…」

俺は確かに見たぜ。

無表情のサインの顔が僅かだが、歪む瞬間をな。

「此奴等はあの悪名高き魔女ガレサの妹だったけな。魔女の妹の取り巻きだった女共だ…」

俺を親の仇でも見るような目つきの女の顎を掴み、サインに見せつけてやる。

「くっ！」

サインが初めて俺を憎たらしいガキを見るような顔を表してきやがりましたよ！

いい！

その顔はいいぜ！

「これからこの魔女の卵共を使って日頃から汗流して働いてくださる看守さんに感謝の意を込めて人生の潤いをご提供してやろうと思ってるわけだが、てめえも一緒に付き合うか？」

サインはむっつり顔で俺を睨んできやがる。

この手のタイプはてめえを傷つけるよりはてめえのために傷ついてる奴等を見せつけてやる方が堪えると相場は決まってるんだよ。

「さあ、どうするサイン。てめえの態度次第でコイツ等は糞ババアになるまで暑苦しい看守様の愛汁を吞ませることになるんだぜ…」

サインは俺の言葉に応えるようにゆらっと立ち上がってくる。

俺の言葉に迷い無く立ち上がるとは勇ましいねえ。

まあ、これでサインが部下思いの熱い女だということは分かった。

それだけでも大収穫というもんだぜ。

「私は貴方を絶対に許さない…」

「へっ？」

今、なんて言った？

確か俺を「絶対に許さない」と言いましたねえ…。

「ひやははははっ！」

これは俺にとって最高のラブコールじゃねえかよ！

「面白いねえ。てめえに許されなければどうするってんだよ？なあ、サインちゃんよ…」

「貴方を殺す…」

おい、てめえはセックス無しで俺の息子を勃起させるつもりかよ…。
マリアが殺気を出して無言でサインに歩もうとしたところを俺は制する。

「ガラム様？」

「構うことはねえよ、マリア。所詮は腐った魔女の卵だ」

俺はサインに近づいて顔を近づけて凄む。

「俺を殺す？面白しれえ。やってみろよ…」

これで俺のルートは確定したわけだ。

俺は暗殺者育成遊戯をサインルートで攻略していくことに決めた。

英雄の妹であり、主人公に殺意を抱くヒロインのルートが一番盛り上がりそうだしな。

まあ、下手するとバッドエンドにまっしぐらだが、それはそれで構わないってもんだ。

元々俺の人生はちんけな殺し屋に抹殺されたときに終わっていたはずだったんだからな。

死と隣り合わせのギャルゲーなんてリアルならではのっていうもんだぜ。

「マリア、てめえの得意のダンスでサインをリードしてやりな」

「畏まりました、ガラム様」

マリアとサインが対峙していく。

さてと、まずはサインのリヨナでも楽しむとするかねえ…。

……。

第13話：ラスボスとの最初の戦いは負けることが約束

俺はエアタバコを吸いながらサインとマリアの戦いを観賞していた。
それで思ったことがある。

「つまらん！なんじゃこりゃ！」

思わず太陽にほえろ！の名台詞を言ってしまったじゃねえかよ！

「申し訳有りません」

「くっ…うう…」

平謝りするマリアと地面で呻いているサインの様子を見て俺は盛大にため息をつく。

サインVSマリアの世紀のバトルは二人の姿がふっと消えた途端にサインを組み伏せていたマリアの姿という形で終幕してしまった。

マリアが派手にランブルやってサインのリョナを見たかったんだがねえ…。

あるいはステイブ・ン・セガールVSトミー・リー・ジョーンズのスタイリッシュなナイフバトルをちったあ期待したんだがな…。

それが全盛期のマイク・タイソンの試合よりも呆気なくて終わっちゃったわけだ。

思わず「金返せ！」と叫びそうになった程だったぜ…。

どうやらマリアは何処までも殺し屋としての殺り癖が身に付いてしまってるせいで勝負は速やかに静かに地味にってのが定着してしまってるようだ。

玄人の戦いが見せ物として一般受けしないのが思い知らされた戦いだったな。

とにかく余りも呆気なさ過ぎるから格ゲーのように3本勝負とするか…。

まずはラウンド1でサインが「YOU LOSE!」ってな感じがねえ。

次はラウンド2と見させてもらうぜ。

俺はばたんきゅーになってるサインを蹴り転がして、でか乳をハリセンでぴしぴしと叩いてやった。

ほほう、プリンみてえに震えているなおい。

「おらおら、さっさと起きろ！昔の偉い人が言ってたぜ。諦めたらそこで試合終了ですよってな」

俺はハリセンでサインのでか乳をぶるんぶるんと振るわせながら激励してやる。

「それともあのアマ共を売春させる場面を拝みてえってのか？んん？」

でか乳をペしペしと叩いてたハリセンを離れて見ている女騎士共をサインに見せびらかすように指す。

「うっ…くっ！」

俺の言わんとしたことに気づいて、サインは苦しい表情を押し殺して健気にも立ち上がりましたねえ。

アニメやドラマだったら感動に打ち震えるBGMや挿入歌を流してやりたいシーンだぜ。

「私はまだ戦う…」

その静かなる闘志がまたツボに嵌ってまたいいぜ。

だけど、それを容赦無くぶちのめすのが悪の華っていうもんよ。

「やれ、マリア…」

ラウンド2ファイト！

「しっ！」

サインはでか乳を振るわせながら猛然とナイフをマリアの五臓六腑を貫こうと繰り出していく！

マリアはそれを涼しげな顔で避ける続けている！

俺が不満そうにしていたのを察したのかマリアは如何にも盛り上が

る戦いを魅せてくれるぜ！

サインはマリアに弄ばれるままにナイフを振るってという情けない姿だが、それ以上に見所が沢山ある。

サインの瑞々しく散る汗！

サインの揺れ動く乳！

サインの荒くも甘い吐息！

我ながら変態なことこの上ないが、何よりも大切な仲間を守るために戦うというお涙頂戴の悲壮感がまたぐつとくるもんがあるな。

「くっくくくっ…」

そんでもってそれをぶち壊したときのカタルシスがたまらなく快感なわけだ…。

「どうしましたか？ それでは私を殺せませんよ…」

「くっ！」

必死に追いつくろうとするサインをどこまで冷徹に優雅に交わしていくマリア。

まさに負けることが前提のレベル1のヒロインとラスボスのイベントバトルみてえな感じだねえ。

まあ、実際サインにとってマリアはまさにラスボス的存在なんだが

な…。

「ダンスに付き合うのも飽きましたね。そろそろ終わりにします…」

「ふっ！」

サインの力を振り絞っての刺突をマリアは猛牛を捌く闘牛士の如く優雅に避ける！

そして、マリアはナイフの柄をサインの延髄の当たりをとんと軽く叩く！

それだけでサインはヘビー級ボクサーのパンチをまともに食らったかのように倒れてダウン！

もうカウントもコンティニューもいらねえな。

「お疲れ様でした」

YOU WIN！

マリアは格ゲーキャラみてえに勝利の決め台詞と共にスカートの裾を上げて優雅に一礼という勝利ポーズを見事に見せつけてくれた。

一方、地べたに這い蹲る敗者サインには黒子擬きに水をぶっかけさせて無理矢理起こしてやる。

「弱すぎるな、サイン。いや、マリアが強すぎただけかねえ…」

俺は顔を上げて無言で睨んでくるサインの頬をハリセンで撫でつけ

ていく。

「これじゃあおっ死んだ姉ちゃんも浮かばれんな。そう思わないか、マリア？」

「ええ、姉君の方はさすがに骨が折れましたが、妹の方は如何ほどもございませんでしたね」

「何で貴方が姉のことを…まさか…」

無感情なサインの顔が引きつって、聞きたくないような事実を突き付けられた絶望感。

俺はつくづく思うわけだ。

そんな絶望に満ちた顔を見るために俺をこの世に産み落としたのではないかな…。

「てめえの姉ちゃんはマリア曰く“お疲れ様”ってやつだ…」

「き…さま！」

サインは顔芸になるほどの形相で俺とマリアを睨みつきやがったぜ！

これまたサインのレアの顔が見れたわけだ。

早速脳内のCG集サイン編に収めねえとな。

「殺す！」

俺に噛みつかうとする勢いで起き上がったサインの頭をマリアが踏みつけて阻んでくれた。

「ガラム様に手出しはさせません」

マリアは冷たい眼差しで地面に伸びてるサインの頭をぐりぐりと踏みにじっていく。

まさに女王様と呼びと言わんばかりの様になった姿だぜ。

「姉君は冥府にて無期限で休養を取られていることでしょう。貴方にもお薦めしましょうか？」

「ぐっ：マリア：貴方だけは：絶対に殺す！」

「楽しみにしています」

何となくだが、マリアって結構乗り乗りじゃねえか？

如何にも熱血バトル漫画風の「悔しかったら這い上がってこい」と言わんばかりの空気だな。

だったら俺も空気を読んで乗ってやるとするか。

俺はしゃがみ込んでマリアに踏まれているサインの顔を覗き込んでいく。

「てめえはこれから姉の仇から暗殺術を仕込まれるわけだ。逃げ場はねえぜ…」

「ガラム…」

俺はハリセンでサインの顔を引っぱたく。

「ガラム様って呼べ。いいか、てめえの髪の毛から乳首に至るまで丸ごと俺のもんだ。てめえは英雄の妹でもねえ。単なる俺の性欲の捌け口だ。悔しかったら俺達を利用する気概で這い上がってこい。姉の恨みを晴らしたければな…」

サインはひたすら俺を睨みつけてくる。

これでサインは死にものぐるいで這い上がってくるだろうな。

何しろ姉の仇に手ほどきを受けるわけだからねえ…。

「せいぜい頑張れよ、サインちゃん…」

将来の火種がどう燃えていくのかが楽しみだぜ…。

……………。

第14話：サイン

さてと、今日の講義はここでお開きにするかねえ。

だが、その前にやらなきゃあならねえことがあるんだよな、これが…。

俺は立ち上がってサインを見守っていた女騎士共を見渡す。

「てめえ等、この女の足枷になるからって舌嚙んで自殺なんて馬鹿な真似はするんじゃないぞ。もし、一人でもやったら…」

マリアは俺の命令を伺うまでもなく一人の女騎士の前に来て、顔を驚ぶかみにして口を無理矢理開かせる。

俺はハリセンを投げ捨てて職人から借りたペンチを取り出してマリアが取り押さえてる女騎士に近づく。

「てめえは確か英雄の妹の側近の一人エリス・ヴィンヤードだったよな…」

「ほれはろうひたっ！」

エリスはマリアにアツチョンブリケな顔にされていることから間拔けな声で答えてきやがってるねえ。

全くシュールなギャグにもならねえコメディだぜ。

さてと、痛みを伴う意識構造改革っていうもんを実践するか…。

「てめえは笑ったときに歯が綺麗だと言われたことが無かったか？ほら、女性は歯が命とか言うだろ。それと白い歯は健康の証だとか。全く健康ってもんはいいもんだよなあ…」

俺はエリスに見せびらかすようにペンチをカチカチ鳴らし、サインの方に向いて笑みを見せてやる。

「けどな、いっつも健康だったらいざ風邪引いたときに免疫力ゼロで成す術も無く逝っちまうよな。それじゃ駄目だろ。健康な奴ばかりが溢れてたら人類はいずれ滅びてしまうかもしれないねえ。極論だが強ち間違えてわけでもねえと思うぜ。骨を折ることで頑丈な骨が作られるように人も丈夫になるためには痛みを覚える必要があるわけさ。だからよ、たまには不健康になってもいいんじゃないの？ということだ。てなわけで人類を救うためにいっちょ不健康になってみねえか？なあ、エリスちゃんよお…くっくっくっ…」

「…っ！」

白かったエリスの顔が青ざめてくるのが分かるぜ…。

「ガラム！」

サインが焦った声を響かせてくる。

「ガラム様と呼べって言っただろ。よく見ておけ。これが痛みを伴う意識構造改革ってやつだ…」

俺はエリスの開いてる口の中にペンチをカチカチと音を立てながら近づけさせていく。

「あああっ！あめろっ！あめれくらさい！」

エリスの目から涙が零れてきやがったな。

「女の涙は武器っていうが、俺の信念は揺るがねえぜ。なぜならば、俺は人類を救うっていう世界一の大義名分を背負ってるわけだからな。はははははっ！だから…不健康になりましたよね…エリスちゃん」

丁寧だが、異様に迫力ある恐い歯医者みてえな口調でペンチを女騎士の口の中に突っ込んでいく。

「は！はめろ！はぎやあああああああっ！」

「これでめえも目出度く不健康な歯抜けババアの仲間入りだぜ！はははははっ！」

狂ったように藻掻き苦しむエリスを余所に良い仕事をやったと言わんばかりに俺は汗を拭う。

世界初6歳児にして無免許で歯医者さんをやっちゃったぜ。

ブラックジャック先生も真っ青のギネスもんかもしれねえな。

「集団自決しよってんならてめえ等の家族を歯抜けにして市中引き回しの刑にしてやるからな」

俺は血塗れになったペンチを弄んでサインに向かってエリスの歯をポイ捨てしてやる。

「今日の講義はこれにて終了だ。せいぜい恨み節を子守歌に寝ることだな。行くぞ、マリア」

「はい、ガラム様」

俺は鼻歌交じりに牢獄から出ていこうとする。

「マリア、今日は俺に添い寝をしろ」

「今日も…ですね。畏まりました」

さて、マリアに添い寝をしてもらうかねえ。

「待って…ガラム」

「ああん？」

二度ならず三度までも俺を呼び捨てにすると良い度胸じゃねえかよ…。

俺は血が滴るパンチをカチカチと苛立たしげに鳴らしながらサインに近づいていく。

「貴方は…いったい何を望んでいるの？」

ほう、「何故、こんな酷いことをするの？」とは聞かないんだな…。

そう言えばサインとともに話すのはこれが始めてじゃねえか？

ひよっとして何かフラグを立てっちまったかねえ。

だったら特別に聞かせてやってもいいか…。

「世界を面白くするためさ…」

「世界を面白くするため？」

サインは分からないって言った顔になる。

まあ、こんな虐待じみた訓練をしていて「面白い世界にする」なんて言っても分かんねえよな。

だけど理解なんてしてもらおうなんてミジンコも思わねえからよ。

「こんなことをしても世界を面白く出来るとは思えない…」

コサインに続いてこの俺にまで説教を仕掛けてくるとは良い度胸じゃねえかよ…。

「ほう、俺を殺すとか言ってた奴がえらそうに説教するつもりか？
てめえには殺し屋だけじゃなくて糞尼になれる素質もあるようだな
…」

「私は宗教国家出身。元々聖職者を目指していた…」

「皮肉を言っただよ！それを素で返してくるんじゃない！」

「ご免なさい…」

怒鳴った俺に対してサインは平謝りしてくる。

何なんだ、このやり取りはよ？

この俺が調子を狂わされてじゃねえか！

ちっ、この女は犬養毅首相じゃねえけど話せば負ける可能性があるな…。

だったら、ここは問答無用で返してやるのがお約束っていうもんだろ…。

「マリア、こいつの歯を抜く。押さえつけろ」

その説教臭い口を糞ババアのように老けさせてやるぜ。

「それは止めた方が良いと思われませんが…」

「何だと？」

俺はマリアにペンチを向けてガンつける。

まさかここに来て「マリア、てめえもか？」を俺に言わせるつもりかよ。

「歯を抜けば噛み合わせが悪くなり、身体能力に影響が出てしまいます。繊細な身体能力を旨とする殺し屋に育てたいのでしたら止めた方が宜しいかと…」

「はああん？何言ってやがる！任務中に顔をぶん殴られて歯抜けに

なることだって…」

言いかけて俺は止めてしまう。

任務中に顔をぶん殴られる状況に陥ること事態暗殺者にとって致命的で失敗を意味してることに気づいたわけだ。

それにマリアにはサインを一流の暗殺者に仕立て上げることが俺は言い渡してる。

だからこそマリアは俺に諫言じみたことを物申したわけだろう。

俺は忌々しげに舌打ちしてペンチをカチカチ音を立てるのを止めてやった。

「ちっ！忌々しい限りだが、今回ばかりは勘弁してやる！だがよ…」

倒れてるサインの顎を掴んで顔を引き寄せて凄んで見せつける。

「てめえが使いもんにならねえ殺し屋になるん…むぐっ！」

「ガラム様！」

俺の頭ん中はPCがブルースクリーンになっちまったかのように真っ青になっちまう。

「んっ…」

目の前には目を瞑ってるサインの顔があった。

だったら、この唇の感触は…。

「ぷはっ…サイン！てめえええええええええええっ！」

俺はサインを突き飛ばして口を拭う。

そんな俺をスカした面で見つめてきやがるサイン。

「貴方をその魔女に洗脳されてるだけ…だから…私は貴方を救う…」

「何電波なことを言ってやがる！よくも俺のファーストキスを…しかも不意打ちで…この逝かれ狂信者の腐れ雌豚がっ！」

俺は生まれ変わって以来初めて本気でぶち切れてしまったぜ…。

サイン、てめえはぶッ殺す！

……………。

第15話：自己分析することで感情移入を回避する

ペンチを持って無表情に見つめてくるサインに俺は近づいてく。

俺に不意打ちをかまして唇を奪うなんて屈辱を舐めさせやがって…。

こいつの歯と言わず、目も鼻も乳首も全部引っこ抜いてやるぜ。

それにこいつは何てほざきやがった？

魔女に洗脳されてるだど？

俺をマリアに誑かされた幼気な糞ガキと見なしながったのも許し難いっていうもんだ。

「落ち着いてください、ガラム様」

マリアが俺の前に立ちはだかってくる。

「ちっ！マリア！てめえはまた俺を止めやがる…むっ！」

マリアは俺の唇に指二本を押しつけてくる。

「エアタバコを吸って落ち着いてください…」

俺はマリアの指を吸って深呼吸する。

「ふう…」

たくっ、俺としたことがつい熱くなっちゃったな…。

投げ捨てたハリセンを拾って自分の頭をぴしぴしと叩いて自分を戒める。

教育者である俺が熱くなってどうする。

もっとクールになりやがれてんだ。

「落ち着かれましたか？」

「ああ、わりいな。マリア…」

ていうかマリアはエアタバコの有用性を理解してくれたんだな。

それはいいとして冷静になるにはまず物事を客観視していかなきゃあならねえぜ。

それには遺憾ながら第三者の意見を謹んで聞かねえとな…。

「おい、その黒子擬きA！」

俺はハリセンをマリアの後ろに控えてる黒子擬きAにびしっ指して名指してやる。

「えっ！黒子擬きAって…私のことなのですか？」

「そうだ、てめえだ。黒子擬きA！それで聞きてえことがあるんだが、俺とマリアは端から見てどう思う。思ってることを言ってみろ」

俺の突然の質問にマリアの後ろに控えてた黒子擬きAがビクついてきやがった。

「はい！え…えと…本当に宜しいのでしょうか？」

「ああ、ぶち切れて歯を引っこ抜くなんて真似はしねえよ。安心して馬鹿正直に答えてくれたらいいぜ…」

黒子擬きAは顔は見えねえけど、どうやら気のないええ女のようなだ。

「分かりました。その…可愛い子供を誑かす悪女…と言う形に…ひい！」

「ああん？」

別に脅してねえのにいきなり黒子擬きAがヘタレやがったぜ。

ヘタレてる黒子擬きAの視線？らしきものの後を追ってみると何とマリアが絶対零度の眼差しでガンつけてらっしゃるじゃねえかよ…。

「おい、マリア…」

「…申し訳有りません」

ほほう、あの鉄の女マリアでも切れるなんていうレアな一面があったなんてな。

こりゃあ新たにマリア編のCG集を脳内で作成して収めとこうかねえ。

「とまあ、てらいのねえ意見感謝するぜ。黒子擬きA」

「あ…ありがとうございます…」

ふん、俺としたことが自分が6歳児のガキだということをもうちつと認識しとくべきだったな。

ファンタジーだからって何でもが俺のとしての非常識ってわけでもないということか…。

「落ち着いた？」

「てめえが言うんじえねえよ！」

俺は逆転サヨナラホームランボールをかつ飛ばすようにサインの顔をハリセンでフルスイングしてやる。

「痛い…」

サインは赤くなった鼻を涙目で押さえてくる。

「つたく…このアマが…」

この電波女と話すと何でこうも疲れやがるんだ？

ていうかあれほど殺意を抱いてた俺の身を心配するなんてどういう風の吹き回しなんだよ？

「あまり怒ると身体に良くない…」

「ぐっ…まだ言いやがるか…」

こいつは女版の犬養毅首相だ。

まともに話を聞いてしまったら負けになっちまう。

マリアは苛立ってる俺を察するように二本指を唇に押し当ててエアタバコを吸わせてくれる。

全く本当に役に立つ女だな、マリアは…。

さてと、決して感情に溺れず冷静に客観視して自己分析しようじゃねえか。

相手を怯えさせるために計算付くでぶち切れるのはかまわねえが、素でぶち切れてしまったらNGだ。

フロイトの転移・逆転移の話を思い出せ。

俺はこの電波女の訳の分からん言動に苛立ってる。

それは何故だ？

俺を幼気なガキ扱いしたからか？

いいや、違うな。

俺が殺人大好きな逝かれ思考の持ち主に対して、サインは汝敵を愛せよと言わんばかりの聖職者気取りの糞尼だ。

最初は俺に殺意を抱いていたが、マリアが姉の仇だとぼらしてしまったことサインの頭の中で俺に対する見方を改めてしまったんだろう。

殺意の矛先を姉の仇であるマリアへと移行させ、俺はマリアに誑かされてる単なる可哀想なガキだと認識しちまったに違いねえ。

そんでもって可哀想なガキだと見なしたことで聖職者ぶって聞いたらねえ愛のノイズを俺に垂れ流してきやがった。

つまり、俺はサインに可哀想なガキだと見なされて同情的な目線で説教されっちまったから苛立ってるんだ。

サインの上から目線で可哀想だから助けてやるという恩着せがましい自己満足の偽善者面にどうしようも無く苛立ってしまったってわけだ。

それで俺は弱い犬のように俺はみつともなく吠えちまうが、サインは全く堪えねえわけで空振ってさらに苛立って疲れてしまうという最悪の悪循環。

なるほど、大いに理解したぜ。

サインという女は俺にとって毒になるような最悪の存在、いわば天敵。

そう言えば陵辱ゲーで調教師が奴隷に感情移入しちまって逆に調教されるなんてみっともねえパターンがあったけえな。

サインはまさに調教師を逆調教する奴隷っていう厄介な立ち位置だ。

ヘタレ調教師は奴隷に抱いた感情に目を背けてしまったからこそ戸惑い翻弄されちまって奴隷に感情移入しちまった。

さらに感情移入がきっかけで、調教するはずの奴隷に無用な愛着を抱き、愛着が愛に変わって遂には逆調教されてしまったわけだ。

だが、俺はサインに抱いてる自分の感情を自己分析して自覚したわけだから感情移入はしねえし、逆調教されてたまるかってえの。

まあ、ファーストキスを奪われたことは犬に噛まれたと思って諦めるしかねえか。

相手が最悪のどブスでなく美女といってもいいレベルの奴に奪われただけでも救いだと思わねえとやっていけねえだろ。

今までの醜態を綺麗サッパリ心の中に仕舞い込んで俺はサインの方に向き合う。

「サイン、てめえは言ったよな。俺がマリアに誑かされてるただの情けねえガキだとな…」

「そこまで言っていない。けど、私は貴方を魔女から救い出すことは確かに言った。貴方は魔女に言われたから仕方なく酷いことをしている…」

たくっ、無口系だと思ったヒロインが何時になく饒舌になっちゃってパパは猛烈に悲しいぜ。

それにしても俺は歯を抜いたり殺させたりと自分の同僚を好き勝手

に弄んでるというのによ。

そんな外道な俺を救うなんてどんだけ凶悪なお人好しなんだろうねえ。

「くっくっくっ…」

「ガラム？」

だったら、そのお人好しがどんだけ続くか限界まで試させてもらおうじゃねえか…。

……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876w/>

暗殺者育成遊戯

2011年10月8日17時00分発行